

『経典』に学ぶ

道場観

経文

当^{まさ}に知る^しべし、是^この^{ところ} 処^{すなわ}は 即^こち 是^{どうじょう}れ 道場^{なり}なり。
諸^{しよぶつ}仏^こ此^{おい}に 於^あて 阿^あ耨^の多^た羅^ら三^{さん}藐^{みやく}三^{さん}菩^{みやく}提^{さん}を 得^{ぼだい}、 諸^え 仏^{しよぶつ}此^こに 於^{おい}て 法^{ほう}輪^{りん}を 転^{てん}じ、
諸^{しよぶつ} 仏^こ此^{おい}に 於^{はつ}て 般^ね涅槃^{はん}したもう。

現代語訳

「みなさん、いまこそははっきりと知るべきです。この場所こそ、私（釈尊）が悟りを開いた場所と同じなのです。そして、法華経が心から信じられ、心に教えをしっかりと受け、持ち続けられ、修行され、生活のうえに実行されているこの場所こそ、まさに諸仏が最高の智慧を悟られた場所であり、諸仏が永遠の教えを説かれる場所であり、諸仏が入滅される（亡くなられる）場所なのです」

〈阿耨多羅三藐三菩提〉—— 仏の智慧、仏の悟りのこと。
〈法輪〉—— むかしのインドでは、徳のすぐれた王には天から輪宝というものが授けられ、その輪宝を転がしていけば、すべてを征服できるという言い伝えがありました。ところが、仏さまの教えは、それよりもはるかに強力なもので、一切の煩惱を打ち砕くということから法輪と言われます。法輪を転じるとは、法を説くことを意味します。
〈涅槃〉—— 涅槃とは、迷いや悩みをすっかり消滅して、永遠に煩惱にまどわされることのなくなった安らかな悟りの境地のことです。般涅槃とは、完全な涅槃に入るという意味で、ここでは、悟りを開かれた仏さまの肉体が滅することをさします。

意味と受け止め方

釈尊の生涯

この経文は妙法蓮華経如来神力品第二十一の一節です。経文は、釈尊の説法を文字に表わしたものですから、経文を読むということは、私たちが釈尊の説法を直接聞かせていただくことと同じであり、釈尊に出会うことなのです。

はじめに、釈尊のご生涯にふれてみましょう。

私たちが親しみを込めてお呼びする釈迦さまは、正しくは釈迦牟尼世尊と申し上げます。シャーキャ（釈迦）族出身の聖者（牟尼）で世に類なき尊い方（世尊）という意味で、略して釈尊とお呼びします。

釈尊は約二千五百年前、北インドのカピラヴァスツ国の王・シュッドーナ（浄飯王）と妃・マーヤー（摩耶夫人）のあいだに生まれ、「すべての望みを成就するもの」の意味を込めたシッダールタ（悉達多）と名付けられました。

しかし、マーヤー夫人は、シッダールタ太子の生後七日目に亡くなられてしまいます。そのためでしょうか、太子は継母のマハー・プラジャーパティー（摩訶波闍波提）の愛情をたっぷりと受けて育ちましたが、感じやすく、もの思いにふけることが多かったと伝えられています。

そんな太子に、シュッドーナ王は、ぜいたくの限りを与えつくします。季節ごとに住み分ける御殿をつくり、大勢の家来を従えさせて、何不自由なく暮らせるようにしました。しかし、青年になった太子は、人間が根本的に持つ苦（生・老・病・死）について深く考えるようになっていました。悩み抜いた太子は、この苦の解決を求めて二十九歳のときに妻子を捨てて出家するのですが、仏伝に出家のきっかけとなる四門出遊というエピソードがあります。

ある日、太子が郊外へ出かけようと東門をくぐると、やせ衰え、いまにも倒れそうに歩いている老人に会いました。次に南門から外出したときは、道端で、うめき声を発して苦しんでいる病人を見ました。また、西門から出たときは、死者を野辺に送る葬儀の列に出くわしました。

人の世のはかなさをうれいた太子は、「人間は、老いや病気、死を避けて通ることはできない。生きていくということは、すなわち苦を受けるとのことだ」と考えました。そしてさらに、「人は何のために生まれてきたのだろうか。なぜ人は老いや病や死の苦しみを受けるのだろうか」と疑問を持つようになりました。そんな太子が北門から出かけたときのことです。すがすがしさを漂わせた一人の沙門（出家僧）と出会いました。太子が「沙門となる功德は何ですか」と聞くと、沙門は「世間の汚れから解脱を得ました」と答えました。

《これこそ私の求めていた道だ！》

歓喜した太子は、こうして出家を決意したのです。

父、継母、妻子、地位や財産すべてを捨てて、太子は沙門となりました。この「大いなる放棄」のおかげで仏教は生まれ、現代まで多くの人びとが救われてきたのです。

沙門しゃもんとなった太子たいしは、高名こうめいなアララ仙人せんにん、ウツダカ仙人せんにんに弟子でし入りして修行しゆぎょうしましたが、すぐに師しと同じレベルおなに達たつしてしまいました。しかし、求めてもといる境地きょうちには至いたりません。次に、当時とうじの沙門しゃもんたちがよく行おこなっていた断食だんじきなどの苦行くぎょうを六年間ろくねんかん続けましたが、それでもまだ真しんの悟さとりに達たつすることはできませんでした。そこで緑豊みどりゆたかな木き（菩提樹ぼだいじゆ）の下したに静しずかに座すわり、深ふかいめい想そうに入はいりました。次々つぎつぎに襲おそってくる心こころの迷まよいと、心しりぞはこれまこころでみなく澄すみわたり、ついには万物ばんぶつのほんとうのすがた、すなわち実相じつそうをありありと見みとおされるようになったのです。つまり、宇宙うちゅうを貫つらぬく絶対ぜったいの真理しんり・法ほう=無常むじょうをはつきりと悟さとられたのです。

仏陀ぶつだ（真理しんりを悟さとった人）となられた釈尊しゃくそんは、その後ご四十余年しじゅうよねんかん間、足あしの裏うらが板いたのようになるほど布教伝道ふきょうでんどうに歩あるかれました。深遠しんえん、難解なんかいなる真理しんり・法ほうを、一人ひとりひとりの生活環境せいかつかんきょうや理解りかいする力ちからに応じて説くとく（方便ほうべん）ことで、人びとの苦悩くのうを抜き去ぬきり、真しんの生き方いかたに目覚めめさせていった釈尊しゃくそんは、息いきを引き取ひられる直前ちよくぜんまで教おしえを請こう者ものに法ほうを説とき、そして、八十年はちじゅうねんの生涯しょうがいを静しずかに終おえられました。

ば どうじょう いまこの場が道場

《いま、ご宝前ほうぜんに向むかっているこの場ばは、釈尊しゃくそんや諸仏しよぶつがご一生いっしゅうを送おくられた場ばと同じなんだ。ここで法ほうを説といてくださっているんだ。ここが私わたしの道場どうじょうなんだ》

経典きょうてんの最初さいしよに道場観どうじょうかんがあるのは、そのことをしっかりと心こころに刻きざみつけるためです。釈尊しゃくそんは、天界てんかい、極楽ごくらくなど私わたしたちと別べつの世界せかいに存在そんざいしたのではありません。現実げんじつのこの世界せかいで生まれ、悟さとりを開ひらき、入滅にゅうめつされたのです。私わたしたちも、真理しんり・法ほうを認識にんしきすることで自みずからの心こころを立て直たすことができ、いまこの場で救おわれ、幸しあわせになり、いのちを輝かがやかすことができるのです。

道場どうじょうとは、修行しゆぎょうのための建物たてものだけをさすのではありません。釈尊しゃくそんが悟さとりを開ひらかれた道場どうじょうも、そこに修行しゆぎょうのための建物たてものがあったわけではありません。林はやしのなかの菩提樹ぼだいじゆの下したに座すわり、そこで真理しんりの道みちを求めて修行しゆぎょうに入はいられたから道場どうじょうというのです。

ですから、私わたしたちが日々ひびの生活せいかつのなかで法華経ほけきょうを読誦どくじゆしたり、教おしえをかみしめたり、実践じっせんする場ばは、すべて道場どうじょうなのです。家庭かてい、職場しよくば、電車でんしゃのなかも、私わたしたちの心こころがけしだい、すべて道場どうじょうになるのです。

しかし、だからといって、道みちを修行しゆぎょうするために建てられた道場どうじょうはいらない、というのではありません。修行しゆぎょうするには、修行しゆぎょうするにふさわしい環境かんきょうというものがあります。釈尊しゃくそんも、禅定ぜんじょうに入はいられるために静しずかな林はやしのなかを選えらばれました。まして、ふつうの生活せいかつを営いとなんでいる私わたしたちは、家庭かていや職場しよくば、街なかなどでは心こころをかき乱みだされることが多く、心こころ

を静かに落ちつかせて真理・法を思うことは容易ではありません。

そこで、道心をおなじくする人びとが集まれる場所を設け、互いに心の持ち方を学び合うことが大切になってきます。そうした学び合いを重ねていくと、しだいに日常のあらゆる場所を道を求める修行の場、すなわち「道場」とすることができるようになってくるのです。

仏さまとの一体感

道場観の最後に、「諸仏此に於て般涅槃したもう」とありますが、なぜここが仏さまが亡くなられる場所だと考えることが大切なのでしょうか――。

それは、「仏さまと私たちは親子の関係なのだから、仏さまは、親が子に寄せる絶対の愛情（慈悲）で見守ってくださっているんだ」という感情を私たちがしっかりと抱いていくためです。たとえば、「ここで親が亡くなったんだ」という場所にたたずむと、親を懐かしむ思いが自然にわいてきます。それと同じで、親である仏さまがここで亡くなられたんだという思いを強くしていくと、自分と仏さまが一つに溶け合った心境になっていくのです。

このように道場観は、すべての場所が道を求める道場となり、私たちと仏さまがいのちの親子として「大きな一つのいのちを生かされて生きている」という一体感を深く心に刻み込むために唱えるのです。

事例から学ぶ

事例編では、各品に込められた教えを、私たちが日々の生活のなかで、どのように生かしていけばよいかを、具体的な事例をとおして考えていきます。

鈴木さん一家登場

事例編の主人公・鈴木さん一家を紹介します。

おばあちゃん・ミチコさん（75）は、佼成会の青年部活動も経験している信仰二代目会員です。

アキオさん（45）は、一家の大黒柱。ミチコさんの末息子です。

アキオさんの妻・タカエさん（38）は婦人部リーダーで、とても行動的。

長女・ケイコさん（16）は、高校一年生。やさしい心の持ち主です。ブラスバンド部でクラリネットを担当。長男・ヒロシくん（9）は、元気いっぱいの小学三年生。いつもにぎやかな鈴木さん一家を、どうぞよろしくお願ひします。

つもの不満

教会道場では午前中、婦人部の研修会が開かれていました。いつもは真剣にメモを取るタカエさんですが、きょうはため息ばかりついています。しかし、それにはわけがありました。

夫のアキオさんは、大型スーパーで食品売り場のマネージャーをしています。仕事から休みは不規則なうえ、せつかくの休みも家でゴロゴロしてばかり。以前は映画を見たり、買い物に出かけたりと、二人で過ごすことが多かったのですが、最近ではタカエさんが「どこかに行こうよ」と誘っても、「また今度ね」と、にべもありません。

しかし、タカエさんの不満は、そればかりではないのです。長女のケイコさんが、高校に入学してからは勉強に身が入らないようで、一学期の成績は平均以下でした。それでも本人は、ブラスバンド部の活動に夢中で、成績のことなど気にしていない様子。「しっかり勉強しなさい」と言っても「わかってる、わかってる」と、まじめに聞いてくれません。近ごろは、自室にいる時間が多く、親子で会話をする機会も少なくなっていました。

長男のヒロシくんは、昨日クラスの友達と大ゲンカをしてしまい、タカエさんは放課後、学校に呼び出されました。家に帰ってヒロシくんを叱ると、「ぼくが悪いんじゃないや」と言ったきり、一切口をきかないのです。

《まったくもう、みんな自分勝手なことばかりやっているんだから！》研修が終わって、お弁当を広げていたタカエさんは、隣に座っていた婦人部長に、思わず愚痴をこぼしていました。

すべてが道場

「うちも同じよ。子どもは心配ばかりかけるし、夫は、休みのたびにパチンコなのよ。『ストレス解消にはこれが最高』なんて言ってるけどね。でも、きょうの『道場観』の研修を聞いて、あらためて思ったの。講師さんが『道場とは、教会道場のことだけではなく、仏さまの教えをかみしめたり、実践する場所は、電車の中でも街の中でも、どこでも道場なんですよ』って言うっていでしょ。私の生活の中心は家庭だから、まず家庭を道場として教えを実践していこうってね」

「うーん、家庭が道場ねえ……」

「ご主人さん、今年マネージャーに昇格したんでしょ」

「うん、課長職なんだって」

「全国にお店がある有名店だもの、お仕事はたいへんなんじゃないかしら。それとケイコちゃんのことだけど、芯はしっかりしている子だから、きちんと自分のことは考えていると思うの。ねえ、鈴木さんがご家族に不満を持っているのはなぜかしらね？こうなってほしいという思いが強いからじゃないかしら……」

「そうなのよ、ぜんぜん言うことを聞いてくれないから……あっ！」

タカエさんは、はたと気づきました。

「相手にこうなってほしいと思うのは、自己中心だからだ。そうか、家のなかこそ、自己中心をあらためる道場なんだ。会員綱領に家庭・社会・国家・世界とあるように、まず家庭のなかでご法を実践し、あたたかな雰囲気をつくっていこう」

タカエさんは、すっきりした面持ちで道場を後にしました。

家族は、いちばん身近な存在であるだけに、どうしても自己中心の心がわき、感情のままに言葉を発したり、行動してしまうことがあります。そこでタカエさんは、《家族を縁として、家族から仏さまの教えにそった見方、考え方、ものの受けとめ方を学ばせていただく》と決意し、まずは家族一人ひとりの立場になってものを考えることに努めました。

夫には休みの日に思う存分リラックスしてもらうことを心がけました。ケイコさんには顔さえ見れば「勉強しなさい」と言っていた自分をあらため、ヒロシくんにも頭ごなしに「ああしなさい、こうしなさい」という命令口調を一切やめて、子どもたちの話をとことん聞くように心がけました。

ときには、つい文句を言ってしまう、反省することもあるタカエさんですが、いま、安らぎのある家庭づくりをめざして、いきいきと教えを実践しています。